



## 編集を終えるにあたって

著者	平川 新
雑誌名	東北アジア研究センター報告
号	3
ページ	97-99
発行年	2011-12-28
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/52484">http://hdl.handle.net/10097/52484</a>

# 編集を終えるにあたって

平川 新



古文書を守るために来るべき災害に備えてほしい、とシンポジウムで呼びかけたのは、2010年11月13日のことだった。それからわずか4ヶ月後の3月11日、震度7の強烈な地震が東北を中心とした東日本を襲った。資料ネット事務局のあった東北大学東北アジア研究センターの建物もエレベーター棟がへし折れ、研究室や事務室では機器類が倒れ、書棚も大きく歪んで書籍が飛び出し、床一面に散乱した。研究棟への立ち入りは、ただちに禁止された。

ラジオからは大津波警報がすぐに出され、沿岸の住民に高台へ避難するよう繰り返し呼びかけがなされた。これは途方もないことになる、と多くの人たちが感じたに違いない。

宮城県沖地震が間もなく発生する。これが宮城県に住む私たちが肝に銘じていたことだった。地震学者によれば周期性の高い地震で、おおむね37年～40年程度の間隔で襲来するということだった。前の宮城県沖地震は1978年だったから、そろそろだ、という覚悟は多少なりともあった。大きな揺れに見舞われたとき、誰もが、ついに来た！と思った。だが、断層の滑りは、想定宮城県沖地震の規模をはるかに越えて、南北500 km、幅200 kmに及んだ。10倍以上の滑りだったという。

3.11大地震のあと、869年（貞観11）以来の大地震、大津波だといわれることが多い。貞観の大津波は陸奥の国府多賀城にまで押し寄せ、千人が死亡したという記録がある（『日本三代実録』）。地質学者の地層研究によっても、今回の大津波とほぼ同じ内陸部まで津波が来たことが確認されている。「千年に一度の大津波」といわれるのは、そのためである。

だが歴史記録には、1611年（慶長16）に仙台湾から三陸地方一帯を襲った、いわゆる慶長津波の記事がある。仙台藩領の沿岸地域では1,800人近くの犠牲者がでたとあり、盛岡藩領でも3,000人ほどの被害があったという。慶長津波の地質学的な研究はまだ十分に進んでいないようだが、宮城県南では海岸線から500 mまで到達したことが確認されている。

今年はその慶長津波から、ちょうど400年である。大きな津波は、「千年に一度」ではなく、「400年に一度」は来ていたのであった。しかし「千年に一度」の言説が普及し、きわめて希な津波だという印象のほうが優っていた。それが、さまざまな油断を招き、あの東京電力福島原発の大不祥事の要因にもなった。

こうした現実を前にしたとき、私たちはどうすればよいのだろうか。古くから災害史という分野が存在し、近年では環境史という、人間を自然の生態系のなかで位置づける視点も提起されてきた。地震研究や津波研究に取り組む研究者も、わずかだが出るようになっていた。おそらく、今回の大震災を機に、災害史や環境史に対する歴史学的関心が高まっていくだろう。それはそれで歓迎すべきことだと思う。

だが率直に言って、歴史研究は今回の大地震・大津波の警報に役立つことはできなかった。貞観津波だけではなく慶長津波などをあげて、大津波の襲来を警告していたのは、アカデミズムの場にいる歴史研究者ではなく、在野の郷土史研究者の方々だった（飯沼勇義『仙台平野の歴史津波』宝文堂、1995年、渡辺慎也「大津波への備え」『河北新報』「座標」欄、2007年9月4日）。深い自省とともに思うのは、今後の歴史学のあり方を考えようとするときに、この事実は肝に銘じておいたほうがよい、ということである。

3.11 大震災と資料保全の活動を考えようとするときに、これだけは皆さんにお伝えしておきたいと思う。

石巻市雄勝町の名振地区には、戦国時代以来の由緒をもつ旧家がある。追波湾の対岸にある北上町（現石巻市北上町）の町史編纂のチームが、10年ほど前から数年をかけて同家文書の撮影と保全に入った。チームリーダーは斎藤善之さん（東北学院大学）と高橋美貴さん（東京農工大学）だった。史料の写真撮影や目録作成に、私も数回参加したことがあった。その後、これらとは別な古文書が出てきたというので、昨年12月に訪問して写真撮影をさせていたいたばかりだった。

3.11 大津波のあと、国土地理院が発表した津波襲来地の航空写真を見て驚愕した。この旧家の屋敷が跡形もなく消えていたからだ。ガソリンが手に入るようになった4月の初め、待ちかねるようにして宮城資料ネットのスタッフと一緒に名振地区に向かった。整理済みの古文書を収めていた石蔵は流出し、壮大なお屋敷も礎石を残すだけだった。戦国時代から明治までのおよそ1万2千点

の古文書は、丸ごと失われてしまっていた。

ご家族の無事を祈って近くの避難所に向かった。お元気なお姿を拝見して安心したが、ご当主から思いもかけないお言葉をかけられた。

「家も財産も古文書も、すべて失ってしまいました。しかし、みなさんのおかげで古文書の写真だけは残りました。ありがとうございます」

胸が詰まる思いだった。

その足で追波川沿いの旧家に向かった。こちらのお宅も昨年12月にお訪ねして、仏壇の引き出しにしまってあった古文書を撮影させていただいたばかりだった。ご当主は別宅に身を寄せておられたが、私たちの姿をみると喜んでくださった。そして、こう話された。

「古文書も写真もみんな流されてしまいました。落ち着いたら、先生方が撮影された写真をいただけませんか」

いずれのお言葉も、古文書は歴史研究者だけのためにあるのではない、ということを感じさせるものだった。家のよるべ、地域のよすがになる、日本の宝なのだ。私たちがおこなってきた歴史資料保全の活動は、こうして地域の方々に受け入れられていた。その意義を、こうした悲しい現実のなかで再認識させられたのだった。